

短 信

つりさげる

小 野 哲

イギリスの博物館で吊りさげられた飛行機をあちこちで見たが、その思い出もだんだん記憶が怪しくなってきた。それはスミソニアン博物館を見物した知人からの吊り下げられた大西洋横断機などの絵はがきをもらった記憶と重なって、一層あいまいな記憶になり、詳細はぼけてあやしくなり殊に肝心な、どのような吊り方であったかさっぱり覚えていない。というより良く見て来なかったからさっぱり思い出せない。吊り下げられた機体と殆ど同じ高さの渡り廊下のような観覧通路から手の届きそうな機体を見ているのに重心付近の吊り金具には覚えがない。揺れ止めのワイヤーの取付もさっぱり記憶にない。

大西洋横断機の写真の方は吊り金具など写る角度でない写真だし補助張線というか揺れ止め索が写っているわけがない。

イギリスの格納庫の吊り下げ機体は古典機に類し多くは1屯位の単発機で、固定車輪が飛び上がったら触れそうな感じだったが複葉か低翼だったかもあやしい。ただ櫃ではなかったこと。それにフロート付きの海軍機でなかったのは確かだというまったく怪しげな記憶なのだ。記憶はすり切れるものなのか。歳の所為にちがいない。

ただ言えることは吊り下げの機体を上から見下ろすのではなく大抵は下から見上げる。真下からでなくななめ下から。上昇姿勢でなく緩やかな下降状態でなかろうか。すこし翼を傾けた下降姿勢。

わからん、思い出せない。

だから同志社の格納庫にグライダーを吊り下げようと思いついた当初は機体保存の為でなく格納庫の床面の有効利用を夢見てのことだった。出動が稀になった機体を格納庫の奥のほうで部室から

は反対側に近い梁から吊り下げる。

プライマリーは組み立てて部室の上へのせる。こうすれば格納庫の床面にソアラ3機がハネをひろげられるではないか。

それが夢に終わった経過は、

部室の上には機体は乗せられません。

ソアラの常時展張はかえって面倒です。

分解して置く方が出動にも点検にも便利で…わたしは、2機吊って3機展張するのは夢の中の美学にスギナイとさとりました。

あきらめた美学のあとに、吊り下げを2機にする現実的アイデアが平成になって動きだします。

同志社航空部の古典機の2機、初級機と複座機をきれいに復元して格納庫の奥に並べて吊る。あぶない、あぶない、下げかたがわからない、吊り上げるんです。

下ろそうと思えばいつでも下ろせるんです。吊り下げが実現するまでの長い準備と経過の詳細は本文でどうぞ。

部長短信

坂口 一彦

最近の航空部を取り巻く内と外の環境についてご報告します。学内での位置付け、その他特に変わったことはありません。航空部の中では復元機の格納庫での吊り下げ展示がやっと実現いたしました。99年度は先輩の皆様方のご厚意とご支援により、6名の新入生が入部し、全体で2桁の部員数となりました。本誌をお借りし厚く御礼申し上げます。東海・関西競技会、同立戦とも戦績は今年度に希望を持たず結果となりました。今年度の目標は上記2競技に十分な戦績を残すことです。

最近の学連を中心とした動きについて述べてみます。まず滑空場の問題ですが、東海・関西では木曾川と福井の両滑空場を使用していますが、関東と比較して学生の飛行回数が少なく、特に全国大会では経験の差が如実に現われています。そこで東海・関西として久し振りの話題は大野滑空場の開設です。大野滑空場は揖斐川の中流、岐阜県大野町にあり、4月下旬の試験運用、10月からの訓練実施までごぎつけました。この間、町との話し合い関係諸官庁との折衝など東海・関西の学連の方々のご苦労が今日の状況を生んだといっても過言ではありません。以前から話題に上り、周囲の理解、官庁の理解を得、着実に開設に向けて進んできました。しかしまだまだ運営上の問題が残っています。今後早急に対応する予定です。OB、OGの皆様方にも楽しく飛んでいただける滑空場へと発展させたいものです。

現在水面下で動いている新たな滑空場開設の話題があります。滋賀県の野洲川河川敷を滑空場として利用できないかといったことです。視察調査の結果、学連として利用の可否の検討に入っています。われわれ関西支部に所属する各大学の航空部にとって野洲川は、何かと便利な滑空場へと発

展することを祈るのみです。福井空港の滑走路の延長の問題とかいろいろと話題に上っていますが、新しい滑空場の開設は部活動活性化の上で極めて喜ばしいことです。しかし維持、管理などの諸経費についても充分検討の上、話しを進めていくのは当然です。学生の飛行回数を大幅増にもっていくためには、多くの先輩の皆様のご支援に負うところが大きいです。

これも懸案事項の一つである木曾川宿舎の建て替えの計画が進んでいます。現在の宿舎は老朽化し、使用にあたって支障が生じつつあります。この問題も永い間にわたる関係者との交渉の結果、今年中には建て替えが完成する予定です。

以上のように学連を中心とした動向は久し振りに活況を帯び、各大学航空部に対するサポート体制は極めて好ましい方向に動いています。現在関西支部では部員数減少のため単独合宿のできる大学は少なくなってきました。冒頭にも述べましたように、1999年度の本学は久し振りに単独合宿を実施できました。今後は合宿経費の節減、機材の共同利用による経費節減など手立てを模索しなければならぬ時代に入っているように思います。若い人達の夢の実現のためのサポート役が私共に課された仕事であります。最近のように多様化した学生気質、1回生と4回生との間にも大きなギャップが存在する時代、しかし時代を否定しては生きられません。現状を容認した上で、実行可能なよかれと思う方策を具現化しなければならないと思う今日この頃です。

監督短信

新 庄 博 志

またこの季節が巡って参りました。毎年毎年この誌面にて勝利の報告を、胸を張って書きたくて仕方ありませんが、現実はなかなかそうはさせてくれません。筆の進みも滞る始末です。

まずを持ちまして、平素は学生の活動に十分にご配慮とご理解を賜りまして、ありがとうございます。また、ここ近年の経済的なご支援は、心に痛み入ります。OB 諸兄のご支援が現実の学生の活動に大きな支えとなっております。感謝の念にたえません。

さて、昨春、有志の方々のご努力と、翔友会からの援助のもと、新入部員の拡大にかかわるプロジェクトを進めさせていただいたのは、昨年の本誌のとおりです。その趣旨、内容に尽きましてはこの場では割愛させていただきますが、結果、この年度末に一年生が6名残留するという、近年にない数に達しました。ここ数年來、一学年ひとりふたりと続かなかで、6名という数は次の年代に十分に知識を落としこめる数であります。これもひとえに、なんの責任もない立場の方々が、その心意気に賛同していただき、無理を押ししてご協力頂けた賜物と思います。文中ですが、この場で厚く、お礼申し上げます。

本来であれば、今春の新人勧誘は学生に全面的バトンタッチするのが主体性の姿でありましょうが、いまこの流れが止まってはもとの木阿弥ですから、今年は全面的に学生にゆだねるのではなくまた、OB が中心となってプロジェクトを進めていくのでもなく、まず学生、OB と共に新入部員から聞き取りをし、このプロジェクトの検証をしました。そしてそれをもとに今年の計画は、学生から企画をあげさせ、OB がそれを整理することによって、いまの学生の意見を反映させることが

できています。ただし、実質の作業の部分と基本的な予算の部分では、まだまだ自立した答えを出し切れず、今年も翔友会の貴重な予算を頂く事となりました。中味に尽いては、昨年の手提袋の代わりにクリアファイルを、駅のポスターは止めて校内のポスターにより重点をおくこと。掛け看板をもう一枚、航空部という文字が大きく書いたものを作ること、あとは昨年と同様紙チラシとボールペンの配付です。

一年生が6名になった今、ほんとに勝負どころは今年だと思えます。この春の一年生がある程度数が残ってくればまずと先は見えてくると思えます。いま一番気をつけないといけない事は、昨年の実績に甘えと油断が出てしまうことです。学生もOB も含め、新たな気持ちで緊張感をもって今年の新人勧誘にあたりたいものです。そこで、もしご理解頂けるのであれば、我々のふるさとを憂いに思っただけなのであれば、貴兄のほんの少しの余っている時間を、航空部のために廻して頂けないでしょうか。少しずつの時間と知恵の積み重ねが未来の航空部を造ると言っても過言ではないと思えます。ボランティアの基本は自分の余った部分を満たされない他の部分に廻すことです。どうか、ようやく先が見え始めてきた今、ひとりでも多くの方の係わりが、明日の航空部を確実なものとしてくれる筈です。

来年のこの誌面の冒頭で、大いなる結果に筆が進むことを期待します。